

News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

十津川村×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウムの報告

【寺岡 伸悟】

さる2022（令和4）年2月13日、十津川村と本研究所の連携シンポジウム「十津川再発見一村史（地理・自然編）発行によせてー」が開催された。

十津川村湯原地区にある体育文化センターに設けられた十津川会場と、奈良女子大学をオンラインで結ぶ二地点開催となった。この形は、研究所が紀伊半島地区の自治体との連携のなかで目指している開催方式であり、紀伊半島の（かりに）小さな山間集落においても、膝突き合わせて議論しながら、かつオンラインで大学や遠方の専門家とも議論できる、というハイブリッドな形式である。ただ、今回は昨年同様、COVID-19の蔓延状況に鑑み、一般の参加者は少数にとどめ、そのかわり、後日、その内容を地元ケーブルテレビで放映するということを前提に企画し実施された。



十津川村長の挨拶(十津川村会場)

今年度の連携シンポジウムを十津川村で開催した理由は、今年度が十津川村置村130年という記念すべき年であること、また、それにあわせて進められている村史編纂事業の第一弾、『十津川村史（地理・自然編）』が刊行されたことである。とくに、村史（地理・自然編）には、本研究所のメンバーが多数執筆に関わっているという深いご縁もあった。

シンポジウムは、小山手村長による開会挨拶のあと、十津川村教育委員会の南学芸員から、村史編纂事業の概要の説明が行われた。その後『地理自然編』を執筆した本学の浅田晴久准教授、西村雄一郎教授、が、それぞれの執筆担当分野を中心に、図表、写真を用いてわかりやすく、本村史の魅力やポイントの紹介報告をおこなった（報告題目は本欄末尾に掲載）。

次に、自然編の執筆代表者の谷幸三先生が、自然編の魅力を写真をたくさん用いて紹介してくださいました。その後、村史執筆にも携わったが、村史編纂事業以前から、学生とともに十津川村で村おこし活動を続けている本学の室崎千重准教授が、十津川村谷瀬地区を中心としたその活動について、生き生きとした報告を行った。

報告の「締め」として、十津川村で教育と郷土研究に携わってこられた、松實豊繁村史編纂副委員長が、十津川村民という立場から『村史（地理自然編）』の意義についてご意見を述べられた。その内容は、たんなる地域史的意義にとどまらず、

TOPICS

- ・十津川村×大和・紀伊半島学研究所
連携シンポジウムの報告
- ・大和・紀伊半島学研究所長の挨拶
- ・第17回若手研究者支援プログラムの報告（古代）
- ・質量分析データの発掘調査（古代）
- ・COVID-19からエクステンション制度へ（なら）
- ・県内公共団体との
地域課題解決のための共同研究（なら）
- ・なら学研究会活動報告（なら）
- ・共生科学研究センター
施設・機器の利用案内（共生）
- ・野外体験実習(夏)報告（共生）
- ・野外体験実習(秋)報告（共生）
- ・第21回共生科学研究センター
シンポジウムの報告（共生）
- ・共生科学研究センターセミナーの報告（共生）

十津川を知ることの国家的、世界的意義をまなざすものであり、その姿に「十津川人」を感じた人は決して少なくないであろう。

すべての報告終了後、一般参加者からの質問が行われたが、各報告の質の高さ、明快さへの賛辞が多く、主催者一同胸をなでおろした。

今回のシンポジウムで関係者一同あらためて感じたことは、一つの地域と時間をかけてつながり学びあっていくことの大切さではないだろうか。その結実のひとつが『十津川村史（地理自然編）』であり、今回の連携シンポジウムであったといえるだろう。これからもこうした「実り」を積み重ねていくことが、本研究所にとっても大切で、地域にとっても価値あるものであることを感じた次第である。

プログラム

- 開会挨拶 小山手 修造(十津川村長)
 南 隆哲 (十津川村 学芸員) 「十津川村史編さん事業について」
 浅田 晴久 (奈良女子大学 准教授) 「十津川村の自然・災害と村の将来」
 西村 雄一郎 (奈良女子大学 教授) 「十津川村の「自然」と風景の50年」
 谷 幸三 (奈良県水生生物研究会 会長) 「十津川村史の自然編の紹介」
 松實 豊繁 (十津川村史編さん委員会 副委員長)
 「『十津川村史 地理・自然編』が刊行されて」
 室崎 千重 (奈良女子大学 准教授) 「谷瀬集落における活動について」
 全体質疑
 閉会挨拶 保 智己(大和・紀伊半島学研究所長)



十津川村会場の様子



奈良女子大会場の様子

大和・紀伊半島学研究所長の挨拶 【保 智己】

この3月を持ちまして定年退職に伴い研究所長を退任することになりました。研究所の設立（2018年3月）には研究所の核となっている共生科学研究センター、古代学研究センター（現古代学・聖地学研究センター）となら学術センターが協力しました。多くの方々が3つのセンターについてはご存じだと思います。しかしながら、設立から4年が経過している研究所の存在については、学内でもそれほど浸透していないように思われます。この紙面をお借りして少し紹介させていただきます。

設立時に3センター長が話し合い、各センターの活動はそれまでどおりに実施し、研究所としての活動としては、他のセンターとは異なった視点でのシンポジウムを3センターが協力して開催することにしました。それが現在も継続している自治体との連携シンポジウムです。第1回は大淀町と第2回は東吉野村、第3回は下市町そして今年度は十津川村と連携して開催しました。研究所の目的の1つに大和、紀伊半島地域の研究に関わる研究者の共同利用の場となる、というのがあります。私は専門が動物の感覚生理学ということもあり、これまで自治体の方々とのつながりはあまりありませんでした。しかし、このシンポジウムを開催することで、多くの自治体には、各々の自治体の文化、歴史、自然に関する研究を進めている学芸員の方々がいることを知りました。研究所としてはこのような学芸員の方々、あるいは学内外で退職後にも研究を続けている研究者等、いろいろな立場で研究を行っている方々を支援するための協力研究員制度を充実させています。

次に研究所の施設ですが、3センター施設以外に学内に研究所独自のスペースはありませんが、2回目のシンポジウムを開催した東吉野村の旧四郷小学校跡の建物を村からお借りしています。3階建ての建物の3階のフロアは2000年から共生科学研究センターが村から有償でお借りしており、これは現在も継続しています。研究所設立時から、村が1階と2階を無償で使用させてくれています。実際には3階と1階を主に使用しています。当初、1階のスペースは空調設備はあるもののそのままではとても使用できる状況ではありませんでした。このような状況の中、藤原副学長がサポートしてくださり、施設の整備を行うことができました。現在ではインターネット環境を整え、大型モニターを設置したミーティングルーム、実習が可能な部屋は2部屋あります。その部屋には実体顕微鏡なども備えています。また、野外での採集道具等も整え、研究者のフィールドワークや野外実習にも対応できます。また、村からもサポートされるようになり、シャワールームが改修されて、建物周辺が整備されました。さらに、今年からは村内のメイン道路から直接校庭に車が入れるようになっていました。この分室は大学と村との関係を象徴しているものだと思います。コロナ禍が終息（収束でもいいかもしれませんが）すればこの施設を実習だけでなく、前述した研究者の方々の交流の場、あるいは一般の方々が紀伊半島の文化や歴史、自然を学ぶ施設になればと思っています。最後に研究所の今後の発展を祈って、退任の挨拶とさせていただきます。



古代 第17回若手研究者支援プログラムの報告 【奥村 和美】

2021年度第17回「若手研究者支援プログラム」を、8月29日(日)に、オンライン(zoomを使用)にて開催しました。今回も、科学研究費基盤研究B「敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の展開」(代表：信州大学 西一夫)・同基盤研究C「歌における説話的意匠の形成」(代表：淑徳大学 白井伊津子)より共催を得ました。

今回のテーマは「萬葉集巻十六を読む」です。現在、故芳賀紀雄氏の遺志を継ぎ、『萬葉集全注 巻第十六』(有斐閣)の早期刊行を目指して、鋭意、注釈が進められています。その注釈メンバーの中から平舘英子氏(国文学)と西一夫氏(比較文学)に、そして本学からは尾山慎氏(国語学)にご講演いただき、それぞれのご専門の立場から巻十六やそれに関わる諸問題についてお話いただきました。なお、各講演の後に、あらかじめ指名した若手研究者数名に質問をしていただき、質疑応答を通してさらに考察を深めました。

オンライン形式による開催はこれで2度目で、開催側にも参加者側にも、前回より不安が少なかったように感じられました。みなさまのご協力のおかげで事故なくスムーズに運んだことに感謝いたします。54名の参加でした。

- 日時：令和3年8月29日(日) 10時30分～17時
 司会：奈良女子大学教授 奥村 和美
 講演：上代の「漢語」—その語形と位置づけ—
 講師：奈良女子大学准教授 尾山 慎
 萬葉集と敦煌関連資料—書儀と類書—
 講師：信州大学教授 西 一夫
 「筑前国志賀白水郎歌十首」考
 講師：日本女子大学名誉教授 平舘 英子

古代 質量分析データの発掘調査 【中澤 隆】

古代学・聖地学研究センターの環境歴史分野においては、昨年度から続くコロナ禍により外国との研究機関との共同研究がすべて中断しています。科研費・新学術領域研究「パレオアジア文化史学」においても共同研究者が予定していた西アジアの遺跡の発掘調査が実施できず、筆者の応募研究「旧石器時代の動物骨に関するタンパク質考古学的研究」では分析を担当している旧石器時代から新石器時代にわたる動物骨が入手できなくなりました。ところが、ここ数年間にわたって蓄積してきた膨大な質量分析データを再検討、つまりコンピューターの中から「発掘」した結果、いくつかの発見がありました。

まず、新石器時代のアゼルバイジャンの遺跡から発掘された動物骨に含まれるコラーゲンのアミノ酸配列をもとに、ヤギとヒツジを区別するためのマーカーを2種類発見しました。骨の成分であるI型コラーゲンはそれぞれ1,000にのぼるアミノ酸が連なった2本の $\alpha 1$ 鎖と1本の $\alpha 2$ 鎖からできた三重鎖でできていますが、ヤギとヒツジ

はそのうちわずか4カ所しかアミノ酸が違います。逆にいえばその4カ所のどれかを特定できればヤギとヒツジが区別できることとなります。これまでは多くの分析試料の膨大な質量分析データを、自動的に解析するソフトウェアを使って処理していたのですが、幸か不幸か分析する時間をほとんどすべて手動の解析に使えたため、4カ所のうちこれまでに見つかっていなかった2カ所の違いを含む配列が見つかりました。

こうして、実際に骨の形を見なくてもヤギとヒツジの区別が比較的簡単にできるようになりました。本来の研究目的は新石器時代のヤギとヒツジの牧畜史を明らかにすることでしたが、日本の古代史の研究にもこの分析手法が適用できるかもしれません。例えば、ヒツジが最初に家畜化されたのは紀元前7,000年頃のメソポタミア付近とされています。一方、日本の歴史に初めてヒツジが登場するのは推古天皇7年（西暦599年）に百済からラクダやロバと共に贈られてきたという日本書紀の記述です。ところが、その頃の中国ではヒツジとヤギの区別が曖昧だったという説もあります。もしどこかの遺跡から動物の骨の破片（専門家が見れば骨の形から区別できる）が出てきたら、ヤギかヒツジか、それとも別の動物の骨かが正確に判定できるでしょう。もし、推古7年の「ヒツジ」がヤギだとなると日本の古代史がどう変わるか（変わらないか）想像してみたくありません。



アゼルバイジャンのHacı Elamxanlı Tepeで出土した形態観察と質量分析結果が一致したヤギの骨（名古屋大学博物館・門脇誠二先生御提供）

なら COVID-19からエクステンション制度へ 【寺岡 伸悟】

昨年度に引き続き、なら学研究センターの2021年（R4）度は、COVID-19の影響のなかでどのようになら学を進めていくかを思案し続ける一年であった。

しかしそのなかでも、なら学研究会（後述）などを下市町にある奈良女子大学下市アクティビティセンターにても視聴・参加できるようにし、COVID-19下で少人数の方しか受け入れられなかったがきわめて好評を得た。

私たちはCOVID-19の負の遺産ばかりに目を向けているわけにはいかない。むしろ、なら学研究センターが従来から提唱してきた、地方分散型社会、知的なネットワークが地方もあまねく覆う社会を実現する好個の機会であると考えられる。

そこで米国にあるような、エクステンション制度（地方自治体の社会教育と大学の研究・教育が連結し、一方向ではなく相互に教え／学び／研究しあうネットワーク型の新社会教育）を、この奈良県から構築していく元年と考えている。まず長年のつながりがある吉野郡下市町等の自治体との連携でこの社会実験の第一歩を踏み出したい。

さて、以下はもう少し具体的に、本年度のなら学研究センターの活動報告である。これらも、上記のエクステンション制度において、大きな側面を担うことになると思われる。

またなら学研究センターのメンバーが関わってきた十津川調査が、『十津川村史 地理・自然編』というかたちで十津川村から出版されたことである。600頁を超えるこの大著は日本最大の村、十津川村にとって記録的な事象であり、以後続く刊行計画の端緒となるものである。これを記念して、本年度は研究所と自治体の連携シンポジウムが十津川で実施されることとなった。

なら 県内公共団体との地域課題解決のための共同研究 【水垣 源太郎】

2021年度実施中の2件の共同研究をご紹介します。

○高取町における支え合いネットワーク構築

1つは、本学が高取町社会福祉協議会と実施中の「高取町におけるコミュニティ主導の支えあいネットワーク構築」、もう1つは下北山村と実施している「下北山村における「関係人口」の創出・定着要因に関する社会人口調査」です。

高取町は奈良盆地南部に位置し、隣接する中心都市・橿原市の商圈に含まれ、大阪都市圏にも属していますが、この1月に全町が過疎地域に指定されるなど、急速に「衰退」しているところです。これに対して下北山村は奈良県の南東端にある過疎山村で、教育、買い物、仕事の面では奈良県内よりも三重県熊野市とのつながりが深い地域です。

高取町では、とくに高齢化の進んでいる3つの地区（大字）を対象として、地区住民の方々、および他出した地区出身者の方々にも質問紙調査を行いました。その結果、これらの地区では、男女ともどの世代においても地区外へ出るきっかけは結婚なのですが、地区出身者の7割以上は県内に居住していることがわかりました。親である地区住民も9割は困ったときに子どもが帰ってきてくれると考えており、3分の1は現在のところ特に困っていることはないと回答していました。しかしながら10年後の生活となると、車が運転できなくなって「近くで食料や日用品が買えない」「近くに病院がない」と不安を感じる人が倍増しています。要約すれば、「緩慢な衰退と漠然とした将来不安」といえるでしょう。今後、これらの成果は、社会福祉協議会とともにワークショップを通じて地区住民と共有し、コミュニティが自ら課題を考えていくための仕組みづくりを発展させていきたいと考えています。



写真、
下北山村での住民基本台帳の個票分析の様子

なら なら学研究会活動報告 【磯部 敦】

■なら学研究会

なら学研究会では、「なら」の研究、および「なら」を研究してきた人びとの再評価をおこなうべく、2021年度は2回の公開研究会を開催しました（うち1回は3月頃にオンラインで開催予定）。

- ・第32回研究会（2021年10月16日）、吉田伊佐夫氏（元産経新聞記者）・小島亮（中部大学人文学部教授）「『生駒新聞の時代 山崎清吉と西本喜一』をめぐって」

コロナウィルス感染状況に鑑み、オンラインでおこないました。また今回初めての試みとして、下市町奈良女子大学アクティビティセンターに視聴会場を設けました。

研究会等の告知、および開会後の印象記など詳細については、なら学研究会ウェブサイトで開催しています(<http://narastudies.hateblo.jp/>)。ご参照ください。

- ・第33回研究会（2022年3月14日）、巽正文氏（元・下北山村歴史資料館長）
「下北山村を知ろう」

スタッフは下北山村に出向きますが、オンラインで行います。今回も下市町奈良女子大学アクティビティセンターに視聴会場を設ける予定です。

■資料の撮影

奈良県山添村下浦家よりご所蔵の近代史料をお借りして撮影しました。また、吉野林業史を研究されてこられた谷彌兵衛氏より、吉野林業資料や吉野地域資料をご恵贈いただきました。谷氏が研究に使用されてこられたもので、原文書など貴重なものも含まれています。こちらも撮影を開始し、あわせて目録も作成しています。今後は『なら学研究報告』誌上で随時公開していく予定です。

撮影にあたっては、本学文学部生2名をアルバイトとして雇いました。また、公開を前提とした撮影のため、狩俣専門職員の知恵をお借りして、画質を考慮した撮影環境を構築していただきました。研究会メンバーのほか、本学職員の方にもご協力いただきました。

■『なら学研究報告』

先に記したとおり、『なら学研究報告』は大和・紀伊半島学研究所なら学研究センター紀要（ウェブジャーナル）です。今年度は、

- ・磯部敦・岩坂七雄・樽井由紀・寺岡伸悟・山上豊
「宝塚澤田家所蔵澤田四郎作史料目録」（『なら学研究報告』6、2021年6月）
- ・磯部敦・加治屋初弥・佐藤さくら・中村栄理子・三浦実加
「【資料紹介】戦後奈良の文芸同人誌『望郷』『詩豹』附.旧蔵者横田俊一の略歴と執筆文献一覧」（『なら学研究報告』7、2021年9月）
- ・磯部敦・小川菜緒
「【資料紹介】戦後奈良の文芸同人誌『オルフォイス』『飛鳥』附.奈良県立桜井高等学校短歌部『大和恋』」

（『なら学研究報告』8、2021年9月）

を公開しました。奈良女子大学学術情報センターのリポジトリで公開しています。ご参照ください。

共生 共生科学研究センター 施設・機器の利用案内 【酒井 敦】

共生科学研究センターは北魚屋東町のコラボレーションセンターに共通実験室（Z108号室）と生物育成室（Z109号室）を備えているほか、東吉野村の旧四郷小学校にある大和・紀伊半島学研究所分室の管理・運営も行っています。Z108共通実験室には微量有機元素分析装置や質量分析装置といった大型精密分析装置が設置されているほか、ここ数年で高性能の蛍光顕微鏡システム、凍結切片作成装置、マイクロコンピュータ、ドローン等が導入されてきました。令和3年度から4年度にかけては試料粉碎装置（Multi Beads Shocker）や各種計測機器（赤外線ガス分析装置、クロロフィル蛍光測定装置等）の導入・整備を進めています。Z109生物育成室は制御された環境（15～35℃、50～60%RH、max 30,000lx）のもとで動植物の飼育・栽培が可能です。東吉野分室に関しては、大型のモニタを備えた主講義室一つ、補助的な講義・作業室が二つ整備され、様々な活動に利用することができるようになっております。

こうしたセンター管理下にある研究・教育用の資源を学内や学外の皆様に広く有効活用していただくことは、センターの重要な使命のひとつと考えております。利用できる機器・施設の情報リストは既にあるのですがセンター関係者限定の公開となっておりますので、センター外部の方にもご覧いただけるようにするとともに、機器や施設利用のための手続きも合わせて分かりやすく提示することで、Z108共通実験室や各種機器（移動可能な機器については貸出も可能）、Z109生物育成室、東吉野分室の共同利用を促進したいと考えております。

これら機器・施設の共同利用については年2回（4月～と10月～）程度、センターHPや職員掲示板を通じて募集を行いますが、年度途中でもご興味のある方は共生科学研究センター事務室（内線3687）までお問合せください。多くの皆様にセンターの機材・施設を利用していただければ幸いです。



写真、
マルチビーズショッカー



写真、
蛍光顕微鏡

共生 野外体験実習（夏）報告 【田中 亜季】

本センターが地位貢献事業の一つとして毎年行っている小中学生対象の野外体験実習を、2021年8月1日(日)に東吉野村で行いました。新型コロナウイルス感染拡大直後の昨年は、東吉野村で行うのを断念し奈良女子大学構内で行ったため、東吉野村での開催は2年ぶりのことです。今年は、小学生11名、保護者5名にご参加をいただき、スタッフ13名を加え、総勢29名で実習を行いました。

屋外では、(1)「川の生き物について学ぼう!」、室内では、(2)「花火の色の秘密に迫る!～いろいろな元素の炎色反応を調べてみよう～」と題した2つの実習を行いました。

(1)の屋外実習では、川の中には瀬や淵、川底への埋まり具合の異なる石(うき石、のり石、はまり石)など、生き物にとってさまざまな生活場所があることを学びました。その後、1個の石の回りについている生き物を集めて観察したり、川底を蹴ることで浮いて流れ出した生き物を網で捕えて観察したりして、それぞれの生活場所にすんでいる生き物の種類や形の違いを学びました。

(2)の室内実験では、リチウム、カリウム、銅、ストロンチウムなど6種類の金属塩を用いた炎色反応の実験を行いました。参加した子供達は、メスシリンダーを使って溶液を調整したり、ホールピペットを使って必要量の溶液を取り出したりなど、化学実験に必要な細かい作業にも熱心に取り組んでいました。炎色反応で見られる、金属によるわずかな色の違いに興味を持った参加者がたくさんいました。

実習参加者からは、「目標のヘビトンボが捕まえられて嬉しかった」、「子どもたちの知らない生き物を見せることができた」、「予想していた色があたりはずれたりして楽しかった」、「炎の色がきれいだった」、「その道のプロやその道の好きな人に学ぶのが一番であると常々考えていましたが、この実習はその点でとても貴重な機会でした」などの感想が聞かれました。



写真.
室内実験の様子



写真.
屋外実習の様子

共生 野外体験実習(秋)の報告 【酒井 敦】

「宇宙・空(そら)から東吉野村を見てみよう」と題する今年度第二回の野外体験実習を、2021年11月20日(土)に東吉野村の大和・紀伊半島学研究所分室にて実施しました。今回は現地集合・現地解散形式とし、東吉野村在住のご家族を含む児童4名、保護者4名にご参加いただき、スタッフ8名とともに総勢16名が現地で実習を行いました。

最初に実習内容に関連する簡単な説明を兼ねて「人工衛星による地球の観測」と「ドローンについて」の講義を行い、その後2グループに分かれて二つの実習(1)「分光反射率の測定実習」と(2)「空から見てみよう!ドローンで空撮」を順次行いました。

(1)分光測定実習では、屋外を散策しながら様々な試料(石や植物、土など)を採取し、分光放射計を用いてそれらの分光反射率を測定しました。

(2)ドローン実習では、大型のドローン操縦資格を持つスタッフによるドローン飛行の実演に続いて、参加者の皆さんに小型のドローンを実際に飛ばす体験をしていただきました。

最後に、参加者全員で東吉野村のシンボルマークである“hy”の人文字を校庭に描き、持参したドローンで空撮して実習を終えました。参加者の皆さんからは「いろいろなものを集めて、測ってみて、目でも分かりやすく楽しかった」「ドローンを初めて操作して楽しかった」などの感想が寄せられました。冬の厳しい寒さが訪れる前の穏やかな天候のもと、現地東吉野村からの参加者も迎え、校庭でゲートボールをしていた地元の皆さんとも交流しつつ無事に実習を終えることができ、スタッフ一同ほっとしております。



写真。
分光測定実習の様子



写真。
ドローン実習の様子

共生 第21回共生科学研究センターシンポジウムの報告 【高田 将志】

2021年12月4日(土)午後1時より、紀伊半島研究会との共催で、「環境教育と保全活動を考える—紀伊半島の海の生物から—」と題し、オンラインでシンポジウムを開催しました。センターシンポジウムとしては昨年度(2021年1月9日)につづく2回目のオンライン開催となりましたが、学内外から42名の参加がありました。講演プログラムは下記のとおりでした。

開会挨拶および趣旨説明

酒井 敦(共生科学研究センター長)

講演者および講演タイトル

木村妙子(三重大学)

: 伊勢志摩地域の海から—外来種駆除活動を通じた環境教育—

平林 勲(串本海中公園センター)

: 本州最南端串本の海から—とくに有藻性イシサンゴ類に注目して—

中野智之(京都大学瀬戸臨海実験所)

: 田辺湾周辺の海から

平嶋健太郎(和歌山県立自然博物館)

: ゆかし潟と内之浦の干潟から

古賀庸憲(和歌山大学)

: 子供の感性を育む干潟観察会—和歌浦干潟と有田川河口の事例—

総合討論

閉会挨拶

前迫ゆり(紀伊半島研究会会長)

酒井敦センター長からは、開会挨拶につづき、本シンポジウムを通して、紀伊半島における海岸生物の生息状況にみられる変化の現状と、それらと関係する沿岸環境の保全や環境教育への取組事例を知ることで、これらの課題を総合的に捉えようというシンポジウム開催の狙いが紹介されました。

これにつづき、シンポジウムの前半では、まず、木村妙子氏（三重大学）から外来種駆除活動と環境教育について、伊勢志摩地域における市民参加による外来植物の駆除活動を事例として、御講演をいただきました。次いで平林勲氏（串本海中公園センター）から、串本沿岸海域の保全活動について、とくに、串本海中公園で実施してきた各種自然体験プログラムや、串本周辺沿岸海域の生物相に特徴的な有藻性イシサンゴ類の保全活動に着目しながらご紹介をいただきました。そして前半最後の御講演では、中野智之氏（京都大学瀬戸臨海実験所）から田辺湾周辺の海をフィールドとした環境教育への取組について話題提供をいただきました。

休憩を挟んだシンポジウムの後半では、平嶋健太郎氏（和歌山県立自然博物館）から、ゆかし潟と内之浦という2つの干潟を比較しながら、それぞれの干潟に特有な生物相と、それと関わる環境条件などについてご紹介いただきました。干潟の保全活動では、それぞれの干潟の特徴・個性に合わせた保全活動が重要であることに気づかせていただけた御講演だったかと思えます。最後の御講演者となった古賀庸憲氏（和歌山大学）からは、和歌浦干潟や有田川河口干潟で続けてこられた干潟観察会の実践例についてご報告をいただきました。一般市民の方々、特に、次世代を担う子供達に対して、身近な自然や生き物に触れる機会を提供することの大切さをご紹介いただきました。

総合討論のセッションは、やや時間が足りなかったようにも感じられましたが、zoomのチャット機能も活用しながら、かなり多様な質疑応答のやり取りが交わされました。シンポジウム全体を通して、紀伊半島沿岸域の生物相の変化と、関連する保全活動・環境教育の現状・課題について考える良い機会となったように思います。

冒頭に記しましたとおり、共生科学研究センターシンポジウムとしては2回目となるオンラインでの開催となりましたが、オンライン方式による開催方式にも、ある程度のノウハウが蓄積されつつあるように思います。共生科学研究センターの今後の諸活動についても、対面に加え、オンラインなどのIT技術もうまく利用しながら、多様化・活発化を進めていければと考えております。

共生 共生科学研究センターセミナーの報告 【田中 亜季】

新型コロナウイルス感染症の登場以降、感染拡大防止のため様々な状況で三密回避の対策が取られてきました。授業や学会などでもオンラインツールの利用が広まってきた中、これまで共生科学研究センター内で行われていたセンターセミナーも2020年度からZoomによりオンライン開催されるようになりました。2021年度からは、さらにパワーアップして年4回のオンライン開催が実現しました。セミナーのプログラム構成も変化し、講演者お一人の研究内容をたっぷりお聞きする従来の1時間の講演（主講演）に加え、センターの先生方による研究・書籍紹介・施設案内などざっくばらんな内容のショートトーク（1回に2～3件、合計30分）も併せて行われるようになりました。オンライン開催により大勢の方にご参加いただける環境が整ったため（インターネット回線の負荷軽減のため先着100名まで）、広く開催案内をすることができるようになりました。今年度は学内やセンターと協力関係にある紀伊半島研究会などからも大勢の方々にご参加いただき、興味深いご講演に熱心に耳を傾け、自由闊達な質疑応答がなされました。今後も、さらに充実したセミナーを目指し、開催していく予定です。

研究所の活動状況（2021年度）

シンポジウム等

◎聖地学国際シンポジウム

「聖地の場」

【日 時】：2021年3月31日(日)

【場 所】：オンラインにて開催

【講 演】：「開墾者たちの新宗教形成—ベトナム・アンザン省の
トゥ・アン・ヒエウ・ギア道（四恩孝義道）を事例として—」

Pham Thi Thu Giang

（ベトナム国家大学ハノイ校日越大学日本学プログラム 准教授）

「熊野信仰の全国分布—関東編—」

齊藤 恵美（奈良女子大学特任助教）

コメンテーター：西谷内 晴美（奈良女子大学教授）

◎第17回若手研究者支援プログラム（古代）

【日 時】：2021年8月29日(日)

【場 所】：オンラインにて開催

【テーマ】：「万葉集巻十六を読む」

◎第32回なら学研究会（なら）

【日 時】：2021年10月16日(土)

【場 所】：オンラインにて開催

【テーマ】：『生駒新聞の時代 山崎清吉と西本喜一』をめぐって

【話し手】：吉田 伊佐夫氏（元産経新聞記者）、小島 亮氏（中部大学人文学部教授）

◎第21回共生科学研究センターシンポジウム

（第25回紀伊半島研究会シンポジウム）（共生）

「環境教育と保全活動を考える—紀伊半島の海の生物から—」

【日 時】：2021年12月4日(土)

【場 所】：zoomによるオンライン開催

◎第33回なら学研究会（なら）

【日 時】：2022年3月14日(日)(予定)

【テーマ】：「下北山村を知ろう」

【話し手】：巽 正文氏（元・下北山村歴史資料館長）

◎十津川×大和・紀伊半島学研究所連携シンポジウム

「十津川村再発見—村史（地理・自然編）発行によせて—」

【日 時】：2022年2月13日(日)

【場 所】：十津川村（主講演会場）

奈良女子大学（副講演会場、一般視聴会場）

開講科目

- ・共生科学（共生）
- ・共生科学特別演習A（共生）
- ・歴史学実習（古代）
- ・大和・紀伊半島学（古代）
- ・なら学（なら）
- ・なら学演習（なら）
- ・地域社会の課題演習（共生）
- ・「奈良」女子大学入門（古代）
- ・なら学+（なら）
- ・なら学フィールド実習（なら）

地域貢献事業

- ◎小中学生対象「野外体験実習」(夏) 日時：2021年8月1日(日) (共生) 場所：東吉野村
- ◎小中学生対象「野外体験実習」(秋) 日時：2021年10月20日(日) (共生) 場所：東吉野村

センター主催セミナー

- ◎2021 年度第 1 回 (通算 24 回) 共生科学研究センターセミナー (共生)
【日 時】：2021年6月2日(水)
【場 所】：オンラインにて開催
ショートトーク
・三方 裕司 (共生科学研究センター、本学研究院工学系)
・酒井 敦 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)
主講演
・三藤 清香 (大学院人間文化総合科学研究科 自然科学専攻)
- ◎2021 年度第 2 回 (通算第 25 回) 共生科学研究センターセミナー (共生)
【日 時】：2021年7月16日(金)
【場 所】：オンラインにて開催
ショートトーク
・保 智己 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)
主講演
・吉本 光佐 (共生科学研究センター、本学研究院生活環境科学系)
- ◎2021 年度第 3 回 (通算第 26 回) 共生科学研究センターセミナー (共生)
【日 時】：2021年12月21日(火)
【場 所】：オンラインにて開催
ショートトーク
・酒井 敦 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)
・遊佐 陽一 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)
主講演
・佐藤 拓哉 (京都大学生態学研究センター准教授)
- ◎2021 年度第 4 回 (通算第 27 回) 共生科学研究センターセミナー (共生)
【日 時】：2022年1月20日(木)
【場 所】：オンラインにて開催
ショートトーク
・酒井 敦 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)
・吉村 倫一 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)
・高田 将志 (共生科学研究センター、本学研究院人文科学系)
主講演
・保 智己 (共生科学研究センター、本学研究院自然科学系)



編集後記

コロナ禍二年目に入りましたが、本研究所の活動は、ご覧のようにオンラインの活用を含め、様々に知恵を出し合って行われています。十津川村の皆様をはじめ、関係各位には、多大なるご協力ご高配を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。有難うございました。来年度は、徐々に対面での活動が増え、地域の皆様とも直接お会いできる機会が増えることを祈っております。研究会やセミナーなどイベントの開催情報については、随時、HPをご参照ください。(奥村)

制作発行 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所
編集者 狩俣 順也 川根 昌子
榎谷 けい子 奥村 和美
連絡先 〒630-8506 奈良市北魚屋東町
Tel 0742-20-3762
担当事務 研究協力課
U R L <http://www.nara-wu.ac.jp/kyi>
E - m a i l ky-i@cc.nara-wu.ac.jp